

## 令和4年謹賀新年

令和になって4年目の新年です。皆様お健やかに新年をお迎えのことと存じます。

令和という新しい時代に入ったとは言え、一昨年から2年間は新型コロナウイルスの感染拡大により世界中がたいへんなことになりました。



2020年は我が主人公「濱口梧陵翁」の生誕200年という大きな節目の年でしたが、これもコロナに直撃されてしまいました。しかし、「梧陵翁」の医学への貢献の思いを受け継いでいたのでしょうか、ヤマサ醤油がコロナワクチンの重要な原材料を提供していたというニュースには、驚きと共に密かに喜んだのは私だけでしょうか。

近年は、毎年大きな災害が発生し、これも心配なことが続いていました。南海トラフの巨大地震が30年以内に70～80%の確立で発生すると想定されたりもしています。

新年のご挨拶で、厳しいことばかり書き並べていますが、こうした時代の中でも、防災を啓発する施設の「稲むらの火の館」に与えられた使命は大きなものがあると心を引き締めています。昨年は、このような防災の啓発活動が認められ、6月には気象庁長官から表彰されました、その上10月にはその長官が自ら見学にお越しいただくという身に余る光栄な出来事がありました。

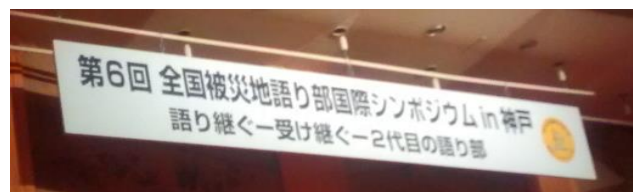
表彰というと、7月には警察法施行記念の感謝状を湯浅警察署長からいただきました。要人警護等で日頃からお世話になっているにもかかわらず、このようなご対応に恐縮するばかりです。

皆様、本当にありがとうございました。

## 「全国被災地語り部国際

### シンポジウムへの参加」

第6回全国被災地語り部国際シンポジウムが、神戸市で開催されました。「稲むらの火の館」も



実行委員として参加させていただきました。また熊野享広川町日本遺産ガイドの会会長は分科会「被災地の語り部ー未来を過去の経験から考える」に提案者として登壇されました。

「阪神・淡路大震災」「熊本地震」「雲仙岳噴火」大分県の「南海地震」の災害伝承の語り部活動家と共に参加者に提案されました。広川町の津波災害伝承活動は、「稲むらの火」と共に、長らく災害を伝承し続けているということで注目されています。また、国際シンポジウムというだけあって、全体会でニュージーランドからもオンライン参加されていました。今回は二代目の語り部ということもテーマで、語り部の高齢化がどこの地域でも課題だということでしょうね。



広川町日本遺産ガイドの会のメンバー10人も今年のガイド研修として参加し、阪神大震災の復興まちあるきを含め、全体会のパネルディスカッション等、朝9時半から夕方5時までの密度の濃い研修会参加でした。

このシンポジウムには、稲むらの火の館をはじめ、本町からは、第一回からほとんど毎回参加して全国の被災地語り部と交流しています。

わかやまこどもエコチャレンジ  
活動レポート展示

# 百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

## 第10回 インクルーシブ防災

わたしのゼミのプロジェクト・テーマは、様々なメディアを活用して「インクルーシブ防災」を全国各地で具現化していくこと。

この「インクルーシブ (inclusive)」という言葉は、包摂すること、包み込むことを意味しています。だれひとり取りこぼさないように、みんなを包み込むといった謂いです。第3回世界防災会議（仙台防災枠組 2015-2030）で注目されたコンセプトですが、これまで国連などで使用されてきたキャッチフレーズの変遷をたどれば、そもそも「Diversity and inclusion」だったことに思い至ります。この前部にある「Diversity」はとても大切な概念で、多様性という意味です。この社会には、大人も子供もお年寄りもいて、元気な人もいればそうでない人もいる、障害のあるかたや難病をかかえている人、外国の人もある… そうした一人ひとりの個性を捨象して、ただ単に「包み込む」と言い始めると、それは上から目線のパターナリスティックな統御・統制の構えになってしまう危険があります。

やはり、そうではなくて、平素は学び合い、有事は支え合う。「困ったときはお互いさま」。個性を尊重し合う信頼関係が基盤となります。

だから、わたしは「inclusive」を直輸入して「包摂すること」と翻訳するよりも、「互いが互いを大事に思うこと」といったふくらみのある和語に置き替えていきたいと考えています。

このようなアイデアを、梧陵さんだったらどのように表現していたでしょうか。“言霊”を胸に宿すことは、安政南海地震で被害を受けたまちの復興にあたっていた梧陵さんであれば、きっと「我が意を得たり」とおっしゃるのではないかと想像します。村人一人ひとりの顔を思い浮かべること。それこそが、梧陵さんの真心の源だったと思うのです。

和歌山県環境生活部が、環境学習の一環として、県内の小学生4, 5, 6年生が、夏の期間を利用してエコ活動(節水・節電・ごみの削減等)にチャレンジしました。その様子をまとめた活動に参加した広小、津木小の児童が提出したレポートが「稲むらの火の館」多目的室に展示されました。広小が39点、津木小5点が12月8日から22日まで展示されました。



## 第16回稲むらの火講座へご参加を

前号12月号でお伝えしましたが、「第16回稲むらの火講座」は、1月29日(土)午後1時半から3時までの予定で開催いたします。

演題 「全国被災地語り部シンポジウムの取組みから考える防災・減災」で、講師は大阪府立大学客員研究員、大阪府防災会議委員をされている「山地久美子先生」です。

定員は60名ですからお早くお申込みください。

### <稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

\*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

\*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

\*記念館だけの入場は無料です

\*また、6月15日と11月5日は無料です